

中国の平和教育

—— 戦争・平和認識における日中の落差 ——

久留島 幹 夫

広島大学大学院

Peace Education in China — its attitude and methods —

Mikio KURUSHIMA

graduate students, Hiroshima University

SUMMARY

The main purpose of this article is to examine peace education in China and to discuss China's attitude concerning peace and war.

The term "peace education (hepingjiaoyu)" does not exist in the curriculum of Chinese education. However education relating to peace can be found in political education, ideological education and in other subjects. We can call it "Chinese peace education." Patriotism and internationalism constitute the characteristic features in the purpose and method. They reflect the modern history of China's national liberation war and the principles of socialism.

It is more important for Japanese people to know that the main part of the "Chinese war of liberation" means the "anti-Japanese war". The fact of Japanese aggression and the spirit of resistance of the patriotic Chinese masses are taught in each subject, especially history and language. Chinese peace education begins with teaching the resistance and victory of the anti-Japanese war.

This attitude toward peace and war that teaches their own proud history of a liberation war, is much different from that of Japan which only teaches the dis-

aster of war by telling the students tragic wartime experiences.

As for China it can be said that this strong nationalism and the facts of the Japanese aggression in the past make it difficult to accept the insistence of Japanese peace education which is based on opposition to nuclear weapons and disarmament. So in order to internationalize Japanese peace education, it is necessary to understand the Chinese attitudes towards peace and war, and to understand various significant difference between China and Japan.

1. 日本の平和教育における中国認識の遅れ

「広島で育った私にとって、広島原爆の惨状、核兵器の脅威を教えられる機会、場所、資料は数多く提供されていた。しかし、日本そして広島が加害者であるということを学ぶ機会は本当に少なかった。」

これは広島大学の総合科目「戦争と平和に関する総合考察」の中で、小林文男教授が行った講義「中国問題と日本の平和」に対する感想である。教授はここで、なぜ広島に原爆が投下されたのかという発問から、広島と15年戦争のかかわりについて講義している。学生の多くは、ショックを受けたと感想に書いている。ひとつは、日本が中国で何をしたかということに余りに無知であったこと、もうひとつは、被害者であった広島が加害者でもあったことに一様に驚き、平和に対する認識を新たにしたりと述べているのである。このことは、従来の日本、そして広島における平和教育に欠けていた点であろう。また、つぎのような感想もある。

「日本は、世界にたくいまれな平和憲法を持ち、特にヒロシマ・ナガサキは世界の平和運動の聖地としての役割を果たそうとしています。しかし米ソの核というような遠い所ばかりでなく、足元のアジアで日本が行ったこと、そして我々はそれをどう捉えどう報いていかなければならないのかを考え、日本の姿勢自体を点検して行かねば……ならないと痛感しています。」

平和教育において、アジア認識が不十分であることを、この学生も指摘している。折りしも昨年は「蘆溝橋事変」（日中全面戦争の開始）50周年に当たり、日本人の中国認識の正否が改めて問われた年であった。これに対する日本側の対応、取り組みはどうであったのだろうか。中国を見れば、これに対する中国の姿勢はきびしく、日本への不信感を感じさせる。

「日本軍国主義者が善良な多くの日本人民の願望に背いて起こした中国侵略戦争は、両国の関係に不愉快な一時期をもたらした。……中国人民はひたすら、前向きの姿勢で、前の仇を忘れ、中日両国の友好関係を発展させようと努力している。しかし、それと同時に、中日友好関係は、歴史を認め、それに正しく対処することを基礎として築かれるべきものである。と強く指摘しておきたい。」¹⁾

日本の中国侵略の罪状を暴露してゆく中国側の取り組みは、いまなお続けられている。記念館にしても“万人坑”として有名な「平頂山殉難同胞記念館」、南京の「日本軍侵華南京大屠殺殉難同胞記念館」の他、「日本軍第七三一細菌部隊犯罪証拠陳列館」が、1985年8月には完成されている。その他、各地方に日中戦争の遺跡、記念館が存在し、日本軍の侵略行為、残虐行為をあげ、中国の若い世代に歴史の教訓を伝えている。これが中国の平和教育といえるだろう。

1985年6月、日本被団協を中心とする平和代表団が北京師範大学を訪れ、平和教育、特に核認識を中心とする平和教育について交流を行った。師範大側の説明によると、「中国の平和教育は児童の時から始め、情操教育、政治、歴史教育の形をとる。原則は、『まず反対し、次に恐れない』ということだ。また祖国の平和のために戦った民族英雄の話を学習したり、万人坑などの歴史遺跡、戦跡などの見学も行う。少年官に行けば原爆の資料を見ることができ、子供たちは、そのようにして知識を得てゆく」ということだった。

日本側からは、「語り部」による歴史の継承の方法や、平和セミナーのようなものはあるのかという質問が出た。また、中国の核抑止論、核認識の甘さを指摘し、青年に銃をとらせないこと、核廃絶なくしては世界平和はあり得ないことが訴えられた。しかし、日中間の議論は残念ながらかみ合わなかった。日本側は、日本での論理をそのまま持ち込んだのであるが、問題は、日本が普遍的に平和の問題を語っても、中国がそれに対して真剣に耳を傾けるであろうかということである。中国の核戦略を批判するのは可能である。しかし、自身の問題を抜きにして、それを語っても、中国の不信感はぬぐえない、原爆を語るにしても、広島が中国侵略の拠点であったが故に原爆の災禍があったことを認めない限り、中国との対話は難しいと思う。さらに平和観、戦争観に於いても、日中間の落差は大きいのである。

師範大側が実戦活動例として“万人坑”や抗日戦争の戦跡の見学により戦争の悲惨さを伝えているとの説明をした時、日本側参加者が、何の反応も示さなかったことは、日中間の溝の大きさを表わしている。中国人が日本人と平和を語る時、どうしても日本侵略軍と戦い、平和を勝ち取ったという歴史を意識する。わざわざ“万人坑”などを持ち出したのは、平和問題で日本人にとやかくいわれる筋合

はないと、一本釘を刺したのだと見るのは筆者らの思い過ぎだろうか。

だが、昨今、このような認識のズレを埋めようとする努力が、少しずつではあるが始められている。広島では『15年戦争とヒロシマ』という平和教育副読本が公刊され、加害責任についても取り組みが始められたからである。²⁾また、平和交流も、1986年5月、広島の被爆者、“草の根”運動家を含めた初めての広島平和友好訪中団が中国を訪問し、“ヒロシマ”を訴えた。続いて、10月には広島県原爆被爆教職員の会の第一次訪中平和友好交流団が、そして昨年8月には、第二次交流団が中国を訪問している。その基本目的は、アジアの国々と手をつなぎ、平和教育の輪を広げようとすることであり、中国への認識は、

「とくに、戦後40年を過ぎた今日、日本の平和教育が本物になりえていない理由のひとつに、中国東北地方、旧満洲国支配13年の日本帝国主義による加害の実態、中国からみれば人道に反した凄惨な被害の実態、さらに日本側には、満蒙開拓義勇軍として学校から直接送り出された13歳から18歳までの少年たち、家族ごと渡満した開拓団などの加害者側の被害者、そして、今日注目されている中国残留日本人孤児の今日までの苦節史などが直視されず、平和教育教材として子どもたちの教室に出ていないということです。つまり、日本の加害行為が濃縮されている旧満洲の実相、戦争の極限教材作りが、最大の課題であります。」³⁾

というように、平和教育における中国認識の遅れと加害責任を問題にしようとしている。これは重要なことであるが、もうひとつ考えておかなければならないのは、こうした日本の侵略の事実が中国でどのように扱われているのかということであり、どのように国民の平和認識、民族感情が形成されているのかということである。同じ平和という言葉を使っても、その背景にある平和認識、戦争観が異なれば、それにより平和の持つ意味も違ってくるであろう。実際、日中間のギャップは大きく、これらのギャップを認識することは、中国と対話する時の前提と言えるが、この点における日本人の認識は未だ不十分に思える。その意味で、本稿では、中国の平和教育の内容を検討することにより、平和という言葉に含まれる中国の平和認識、民族感情の特質を明らかにしたいと考えた。この作業は、日本の平和教育が国際化していく上で、またアジアの対日認識を理解する上で、不可

欠の課題であろう。

2. 中国の平和教育の内容と方法

中国語で平和は“和平”というが、“和平教育”という定まった用語があるわけではない。ただ、平和教育を、その国の平和の立場を伝え、平和認識を育成する教育と広義に捉えれば、中国では、思想政治教育、とりわけ愛国主義教育、国際主義教育がそれに相当する。その内容の枠組みを明確にするため、まず、日本の平和教育との対比を試みてみたい。

日本の平和教育の第一の課題は、戦争体験の継承である。戦争体験の悲惨さ、非人間性を訴えることにより、戦争に反対し、平和を希求する心を養うということである。課題としては、原爆、空襲、戦時下の生活、戦場体験等が扱われている。これに対し、中国での戦争体験の継承は、戦争の悲惨さを訴えるというよりも、革命的伝統の継承と、祖国の平和、独立を守るため戦った者の精神を伝える愛国主義教育の形をとる。テーマとしては、欧米列強の侵略に対する抵抗運動、抗日戦争など、民族解放闘争であり、平和は祖国を守ること、戦い取ることと考えられる。

次に、日本では、認識の深化として、戦争はなぜ起こるのかという原因の科学的認識が試みられ、天皇の戦争責任、軍国主義、国民としての自覚などが問題にされる。これに対し、中国は社会主義の立場が明確であり、帝国主義反対、民族解放闘争支援、世界平和の擁護が主張され、この中国政府の政策の宣伝教育が重要な課題である。平和という言葉は対外政策を説明する際によく使われる。

また、平和教育は実践課題として、平和運動との関係も生まれる。反核、軍縮という現在の平和運動の課題は、そのまま平和教育の課題となる。これらの平和運動、平和教育は日本では民間の努力として発展してきたのに対し、中国では、政府主導の宣伝教育という傾向が強い。

さらに、平和教育は、人間形成という教育的位置づけとして、戦争という非人間的行為を否定することにより、人権尊重を訴える人権教育という側面もある。これに反して中国では、平和は政治的理想教育としても取り扱われるが、より直

接的には、共産主義社会を打ち立てるという理想の中で平和な社会が語られるという形をとる。このように、平和教育の内容を、日本の場合の指標をもってしても、中国は捉えがたい側面を持つことを認識すべきであろう。以下上に表われた、革命伝統教育、国際主義、愛国主義教育の内容を検討しながら、中国の平和教育の場と方法を考えてみたい。

中国政府の政策や、基本的考え方は、直接には、その時々々の形勢教育（情勢教育）で学習されるが、平和認識を育てる場としては、教学（授業・教科）分野では、思想政治教育、歴史教育、語文（国語）教育が考えられる。ここでは、革命伝統教育、愛国主義教育、政治理想教育として、戦争体験の継承、平和への理解が語られる。歴史と語文教育は後で見ることにして、まず、思想政治教育を検討してみる。

思想政治教育は、学校教育全体を通じて行なわれるもので、各教科はもちろん、課外活動もすべて、思想政治教育と結びつけられている。思想政治、道徳教育を専門的に行う教科としては、小学校で、思想品德科があり、五愛（祖国、人民、労働、科学、社会主義を愛する）を中心とした共産主義思想品德教育を行っている。中学では政治科が設けられており、初級中学（中学校）では各年次毎に「青少年修養」、「法律常識」、「社会発展略史」が教えられ、高級中学（高等学校）では、「政治経済常識」、「弁証唯物主義常識」が講じられている。⁴⁾

これらの教科における平和の取り扱いであるが、典型的なのは「青少年修養」の愛国主義を語る次の部分である。

「祖国を愛すること、それは祖国を防衛する栄えある責務を担うという志を立てることから始まる。世界には、まだ帝国主義、覇権主義、植民地主義が存在しており、我々は不断に国防力を強化し、我が社会主義国家を防衛しなければならない。覇権主義に反対し、世界平和を擁護することは、今日の世界人民の最も重要な任務である。」⁵⁾

このように、愛国、祖国防衛、世界平和の擁護が同列に並んでいる。生徒は、これをどのように学ぶのか、その結論をテストの解答で見てもよい。高校入試の政治分野で出題された「新しい歴史時期に於ける愛国主義の内容とは何か？」という質問に対する模範解答は、「①社会主義現代化建設を推進する、②台湾を含

む祖国の統一を図る、③覇権主義に反対し、世界平和を擁護する」ということである。言い換えれば、祖国の富強を図り、中華民族の民族の尊厳を守り、同じ民族の尊厳を守ろうとする者を支援するということになる。ここで言う世界平和とは、戦争をなくすることを意味するのではなく、抑圧された民族のために闘うことを意味する。平和は、軍隊により守るものだと考えられている。

ここで、中国の戦争観について触れておきたい。周知のように、毛沢東はかつて「歴史上のすべての戦争は、ただ正義と非正義の二種類しかなく、……一切の革命戦争は、皆正義の戦争である」⁷⁾と述べた。つまり、正義の戦争は、被抑圧階級が革命的手段を用い、祖国の社会発展の障害物、即ち反動的統治者や、腐敗墮落した政権を打ち倒す戦いであり、また全民族が外国侵略者に反抗し、民族の尊厳と国家の独立を守る戦い、それが正義の戦いと規定される。

毛沢東においては、戦争の目的は戦争を消滅させることであり、人類社会が発展すれば、戦争はなくなるべきものであると考えられている。

「人類社会が進歩し、階級と国家を消滅させるような段階に達した時、その時こそ、どのような戦争もなくなるのである。反革命戦争はなくなり、革命戦争もなくなる。非正義の戦争も、正義の戦争もなくなる。これが人類永久平和の時代である。」⁸⁾

このように共産主義の理想社会へ至った時、戦争はなくなり、恒久平和の世が到来するわけである。しかし現実問題として、その理想へ至るために、現時点での戦争を肯定している。同時に、中国自身の戦争の正当化の理由としても語られる。ある意味では、非常にプラグマティックな発想であるといえよう。

このような戦争観も、思想政治教育や愛国主義教育を通じて伝えられるが、中国の特色は、課外活動としての思想政治教育が、少年先鋒隊、共産主義青年団の形に組織されていることである。では、それらの組織による活動とはいかなるものか。

少年先鋒隊（以下、少先隊とする。）は、7歳から14歳までの少年を組織した児童組織であり、「共産主義を学ぶ学校」として位置づけられている。かつては、児童の先進分子が選ばれて入隊したが、現在は、学校単位で組織され、原則として全員参加である。少先隊の活動は、文化、科学、体育、レクリエーションと多

方面にわたっているが、思想工作に関する活動としては以下のようなものがある。

①革命の歴史を学び、革命老人を訪問したり、革命記念館、革命博物館を参観し、先達の栄光ある革命の伝統を引き継ぐ、②雷鋒、張海迪など各方面の先進人物や模範的人物に学び、彼らを模範として社会奉仕活動を組織し、人民に奉仕するという態度を学ぶ、③近代化した工場、社会主義的新農村を見学し、祖国、人民への愛情を育成する。④“雷鋒に学び、新しい精神を樹立しよう”、“五講四美三熱愛（文明、礼儀、衛生、秩序、道徳を重んじ、心、言葉、行為、環境を美しく、祖国、社会主義、共産党を愛する）等のキャンペーン活動を行い、共産主義道徳を育成する、⑤“80年代の小主人公として”、“愛すべき故郷”など各種の討論会、講演会、⑥定期的活動、例えば清明節の時、革命烈士の墓を掃除する。新年や春節（旧正月）に、犠牲となった兵士の家族や解放軍を慰問する。革命記念日、革命指導者、英雄人物の記念日に記念活動を行う。

このような組織活動を通じての理論と実践の統一を図るのが中国の平和教育の特色である。注意したいのは、戦跡などの見学は、あくまで、革命の伝統を引き継ぐ立場で行なわれることと、身近な戦争に対する対応である。中国兵士の戦いは、祖国を守るためであり、それは、尊敬すべき行為として教育される。この点を否定することで葛藤を続ける日本の平和教育との決定的な相異点である。

次に1986年の少年先鋒隊夏休み北京キャンプの報告を少年先鋒隊の活動の一例として挙げてみよう。¹⁰⁾このキャンプは、地方から少年先鋒隊の代表が北京に集まり、首都の参観と活動交流を行うものである。この報告は、河南省安陽県東南營小学校5年1組中隊の例で、テーマは「老山前線から送られた“戦争”」である。中国は今だにベトナムと交戦中であり、雲南国境線の老山では戦闘が続いており、この辺境を守る兵士達を励ますキャンペーンが行なわれている。

この中隊（＝クラス）も、『中国少年報』に載った記事に触発され、中隊で手紙を出す。すると同じ安陽出身の兵士から返事が返って来る。しかも戦闘を実況録音したテープも別送したという。テープが届くまで、この中隊は各小隊（班）に分かれ、種々の活動に取り組む。第一小隊は安陽の新しい写真を送ることにし、第四小隊は、兵士の家族の所に慰問に行く。テープが届いた日、特別の隊会を開き皆でテープを聞く。

「『ダダダッ!』『中国の領土を守るため、若い辺境を守る兵士達は、流血や犠牲を恐れず……生命尽きるまで戦いを止めない』解説者が銃声をバックにし、去年8月に起こった老山前線の戦いの模様を語る。『撃て!思い切り撃て!』隊員の李剛が、辺境を守る叔父さん達の愛国精神に鼓舞されて、思わず拳を振り上げる。中隊会で隊員は私たちの純粋な心を手紙に託すことにした。」「私たちが行った今回の活動は大変有意義でした。私たちは、辺境を守っている叔父さんが大好きです。愛すべき祖国が大好きです。私たちは祖国の将来の後継者です。しっかり学習し、大人になったら革命の事業を受け継ぎます。偉大な祖国を建設するために、共産主義の偉大な事業のために、私たちの今が存在するのです。!」

ここまで来ると、果たして平和教育とっていいのか疑問である。しかし中国にとっては、やはり平和教育の範疇に入るであろう。なぜなら中越紛争は、ベトナムの侵略に対する中国の防衛戦争と考えられているからである。

共産主義青年団（以後、共青团とする。）は14歳から25歳までの青少年を組織したもので学校以外にも、工場、農村、政府機関、解放軍などに支部があるが、中等以上の学校の団組織は、その中核としての役割を担っている。共青团も、少年先鋒隊と同様な活動を行うが、少年先鋒隊が情操教育中心であったのに対し、共青团では、報告会、学習会などの理論学習も行われており、その思想教育の主な項目は、①マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、②党の路線・方針、政策と形勢教育、③理想教育、④道徳教育、⑤紀律教育、⑥革命伝統教育、⑦愛国主義と国際主義等である。

戦争体験の継承は、革命的伝統教育、愛国主義と国際主義教育の中で語られる。革命的伝統教育とは「党、共和国、軍隊の歴史、革命的青年運動の歴史を理解させ、祖国の解放と富強のために戦った中華民族の優秀な子弟、輝かしい功績を宣伝する」ことである。愛国主義教育とは「祖国を愛し、人民の創造した歴史文化を愛することから、祖国の前途への関心、人民の事業への忠誠、党と社会主義への信頼を育て、そこから祖国に報ずるという社会的責任感を強化する」ことである。愛国主義は国際主義と結合されねばならない。すなわち、「国家の尊厳と人民の利益を守ることを前提に、各国人民と友好交流し、世界の大事に関心を持ち、

世界平和を希求し、世界各国人民及び青年の正義の事業と闘争を支持する」¹¹⁾ことである。

このように見てくると、革命伝統、愛国主義、国際主義は、戦争と平和を考える上での原則的立場であることがわかる。しかも、これらの諸原則は、日本の平和教育の議論とかみ合わないものが多いのである。日本の平和教育は、日教組の「教え子を再び戦場に送らない」というスローガンを起点とし、反原爆教育を基軸として展開してきた。その目的は「戦争のもたらした惨禍を、教育における戦争責任をみずからきびしく問いつめ、痛苦にみちた軍国主義への反省に立ち、平和と民主主義をめざす教育、とりわけ戦争の本質を科学的に認識し、平和を守る意欲と情熱を持つ人間の育成」¹²⁾である。これに対し、中国は、革命の伝統を受け継ぎ、自国の富強と発展に尽くす人間、銃を取ってでも祖国の平和を守ろうとする人間の育成が、その目標であるといえるだろう。戦争責任は、侵略した側にあるのである。中国の平和教育の基軸は、強烈なナショナリズムに貫かれているといえよう。

3. 語文（国語）教育と歴史教育に見る“平和教育”

(1) 語文教育における戦争体験の継承

語文教育の中には戦争を扱った文章は多く、ストーリーも明快である。そこで、小学校語文教科書から、これらの文章を取り上げ、その戦争体験継承の特質を検討してみる。各年次の戦争に関する文章は以下の通りである。

1年次 なし

2年次 a 「釣竿の秘密」

3年次 b 「秘密の学習」、c 「劉胡蘭」、d 「英雄爆破手」

4年次 e 「貴重な教科書」、f 「黄繼光」

5年次 g 「草原夜行」、h 「第24号船」、i 「瀘定橋を奪う」、j 「浪牙山の五烈士」

6年次 k 「烏江天險を突破する」、l 「我が戦友邱少雲」、m 「小英雄雨来（雨来は少年の名）」、n 「金色の釣針」¹³⁾

以下、ストーリーを分類してみる：

- (イ) 死を恐れず戦ったり、活躍したりした子供の話： a, b, e, m
- (ロ) 戦争を如何に戦ったか。その精神を称揚する： h, i, k
- (ハ) 抗米援朝運動（朝鮮戦争）で英雄的な死を遂げた： d, f, l
- (ニ) 戦争中起こった悲劇： g, n
- (ホ) 革命烈士の話： c, j

「c」の「劉胡蘭」は、抗日戦争中に共産党の活動に参加し、国共内戦時に、党の秘密を守り、15歳で犠牲となった少女である。我が身を振り返り見ず果敢に生き、若くして死んでいったこの小さな中国の星を賛え、毛沢東は「偉大なる生、光栄なる死」という言葉を送った。劉胡蘭の彫刻は、上海少年官をはじめ、全国に建てられ、革命の模範となっている。このような、祖国のため、革命のため恐れず死に殉ずる精神は、革命伝統教育の中で強調されている。

中学3年の教科書に出て来る革命烈士の詩も、この精神を表現している。参考までに挙げてみたい。作者は重慶の紅岩村附近で犠牲となった共産党員の李少石である。

「南京書所見

丹心已共河山碎 大義長争日月光
不作尋常床蓐死 英雄含笑上刑場」

※（党への赤心は 山河が尽きるまで共にあり、大義は、日月の如く永久である。普通の死に方をするつもりはない。英雄は笑みを浮かべて刑場に赴くものだ）

これは革命家の気概を賛えた詩である。教科書には、この詩の鑑賞として、次のような設問が添えてある。

☆「烈士たちは自らの鮮血で、共産主義に対する無限の信頼と忠誠を歌った壮麗な詩を書いている。あなたはこれらの詩を読んで、どんな教訓と励ましを得たであろうか？」¹⁴⁾

一見して、語文教学においても多分に思想教育の要素が濃厚に含まれている。戦争や革命を扱った文章は日本のように自らを被害者の立場に立たせ、観念的に戦争の悲惨を訴えるだけのいわば戦争体験の継承ではない。むしろ、死を恐れず、

祖国や革命のために戦った者たちの精神を受け継ぐことが強調される。(二)の戦争中の悲劇を描いた2つの文章にしても、長い行軍の途中倒れた者の無念さを、自らの闘争に転化する立場であり、祖国のために死に殉ずる戦闘英雄の形象が、そこには脈々と生きています。これらのストーリーは、小学生の戦争観、革命観の形成に大きな影響を及ぼすにちがいない。

(2) 歴史教育と愛国主義教育

中国では、初級中学で自国史、つまり、中国史、高級中学で世界史を学ぶ。中国史が語られる際には、愛国主義の立場が反映されている。

中国の歴史教育の目的は、基礎的な歴史知識、歴史唯物主義的観点の理解と同時に、「学生に社会発展法則を教え、革命伝統教育、愛国主義と国際主義教育を行い、学生が社会主義祖国を愛し、社会主義事業を愛し、共産党を愛する気持ちを育成し、歴史上優秀な人物の高い人間性を学び、社会主義現代化に献身する精神を打ち立てる」¹⁵⁾とされている。

この“歴史上優秀な人物”は、世界に誇る科学的発明、文化的な創造を行った者だけでなく、愛国者の系譜も含まれている。その精神は、「国家興亡、匹夫有責（国家の興亡は一人一人に責任がある）」という言葉で表わされる。古来戦国時代の愛国詩人屈原、異民族王朝金と戦い失地を回復しようとしながらも、讒言により毒殺された南宋の岳飛、同じく異民族と戦い、捕らえられても節を曲げなかった南宋の忠臣文天祥、倭寇を退けた明代の武將戚繼光、清代、オランダに奪われた台湾を取り戻した鄭成功、近代になればイギリスのアヘン密売を毅然として摘発した林則徐など外来の侵略者と戦った人物は、数多い。

このような愛国主義の強調で、当然のことながら、歴史事件の評価そのものが、日本のそれと異なってくる。中日甲午戦争（日清戦争）対する見方の相違は、その端的なものであろう。

周知のように、日清戦争の原因を、日本の教科書は、日本の朝鮮進出と、宗主国であった清朝の朝鮮での権益めぐりの対立として説明されている。これに対して、中国の教科書では、日本の朝鮮侵略が原因とみなし、清朝が朝鮮を属国とみなし、宗主権を主張していた点には少しも触れていない。また、戦争の記述では、日本

の教科書が戦局が日本に有利に展開し、日本軍の方が士気も高かった。と記述しているのに対し、中国の教科書では、平壤戦役の左宝貴の壮烈な最後、黄海大戦の鄧世昌の英雄的抗戦など英雄的な戦いが記述される。左宝貴は、司令官が逃げた後、司令官に代わり戦いを指揮し、最後まで戦って壮烈に戦死した人物である。鄧世昌もまた、自分の軍艦が戦闘不能となるや、日本軍の先鋒艦“吉野”に特攻を敢行しようとした軍人である。不運なことに、鄧世昌の艦は途中で魚雷を受けて沈没し、鄧世昌以下250名余りの将校、兵士は艦と運命を共にしたのである。この二人以外にも勇敢に戦った民族的英雄、兵士の記述が多々あり、清朝軍の士気が低かったとする日本の教科書の評価、記述とは大いに異なる。¹⁷⁾

さらに、中国の教科書では、日本軍が旅順占領後、住民を虐殺したことや、馬関条約（下関条約）締結後、台湾割譲に対し、台湾でこれに反対する抗日闘争の事実を記述しているが、日本側にはこの記述はない。こう見てくる時、日中相方の歴史記述のギャップは、日本、中国の立場の違いと同時に、中国が愛国主義を原則とした歴史記述をしていることから生まれると考えられる。

もうひとつ触れておきたいのは、愛国主義と国際主義は結合されなければならないと主張されていることである。それは、つぎのように定式化されている。

「真の愛国主義とは、数千年来代々つたわってきた自分の祖国、人民、言語、文字および自分の民族のすぐれた伝統にたいする愛着であり、そうした愛国主義は、あの我利とうぬばれの排外主義的ブルジョワ的民族主義や、あのたちおくれた家父長的、小農的な狭い封鎖主義、孤立思想、セクト主義、地方主義などの民族的偏見とはなんの関係もないものである。純粋な愛国主義は、他の民族との平等を尊重し、同時に世界人類のすぐれた理想を自分の国内で実現することを希望し、各国人民との親密な団結を主張する」¹⁸⁾

これは、社会主義的プロレタリア国際主義の立場である。同時に、強烈なナショナリズムをその動因とする中国革命の性格上、そのナショナリズムに陥らないための努力であるともいえる。

4. 愛国主義教育の中の日本

日本の平和教育の学習課題が、第二次世界大戦中の悲惨な体験、原爆であることについてはすでに述べた。同様に、中国では、抗日戦争が、第一の学習課題であることも、はっきりした。日本軍の罪行を暴露し、中国が侵略により如何に苦汁をなめたかを知り、それと如何に戦い、如何に解放を勝ち取ってきたのかを語るのが中国式平和教育であろう。これは具体的には革命伝統教育、愛国主義教育の形で語られることになる。

上述した語文教育でいえば、「釣竿の秘密」「秘密の学習」「狼来山五烈士」「小英雄雨来」はすべて抗日戦争を題材としたものである。そして、これらの文章に出てくる“敵人”“日寇”“鬼子”は、日本兵への蔑称である。たびたび出てくる日本兵の横柄さ、蛮行の記述に、中国の国民感情を読み取ることができる。「小英雄雨来」の一部を抜粋してみよう。この物語は、“掃蕩”に来た日本兵に捕まった雨来少年が、情報を聞き出そうとするきびしい責めにも頑として口を割らなかった姿を描いている。

「鼻の平べったい軍人の目は突然凶悪な恐ろしい目になり、体を曲げて手を伸ばした。ああ！その両手は鷹の爪のように雨来の耳をつかみ、両側に引っばった。雨来は痛さのあまり口をゆがめて叫んだ。鬼めは、また手を伸ばし雨来の顔にビンタを食らわせ、顔の肉をつまみ、憎々しげにねじり上げた。……鬼めはまた彼の胸に一発食らわせた。……雨来はしばらくすると、息が苦しくなり、頭の中はハチの巣のようにウォンウォン鳴り、両目がチカチカし、鼻血が流れ始め、ポタポタと教科書のあの字の上にしたたり落ちていった。

“我々は中国人である。我々は自分の祖国を愛する”

鬼めは殴り疲れたが、雨来はやはり歯を食いしばり言った“知らない”²⁰⁾

語文教科書の記述は感性的であるが、歴史教科書も、語文教科書に劣らず、日本軍の罪行を余すところなく暴露している。南京虐殺の記述を見よう。

「日本侵略軍は、いたる所で焼き、殺し、奪い、それは残虐を極めた。無数の都市や農村が廃墟となり、1,100万人の中国人民が惨殺されたのである。

日本軍は南京占領後、気違いじみた大虐殺を展開した。平和に暮らしていた

南京の住民は、ある者は射撃の的にされ、ある者は刀の試し切りの対象にされた。石油をかけられ焼き殺された者、生き埋めにされた者、心臓をえぐり取られた者もいた。調査によれば殺された者は総計30数万人にのぼり、焼失、破壊された家は三分の一にも達した。その日、北京城内には死体が累々と横たわり、瓦礫は山となり、陰惨な風が吹き抜け、瞬時にこの世の地獄と化した。敵の残酷非道な行いは、全国に比類のない憤怒をまきおこしたのだった²¹⁾

抗日戦争は、歴史教科書第4冊現代部分の4分の1を占める。当然日本の侵略、罪行の暴露、中国側の闘争という記述が続く、これは逃れられない事実である。しかも、1987年春季から使用される教科書は、更に一步進んで日本帝国主義の中国での罪行を暴露する方向で改訂される予定である。²²⁾

改訂される内容は、例えば、“七・七”蘆溝橋事変の項目では、その晩日本軍が“演習”を行い故意に挑発し、蘆溝橋事変を引きおこしたという真相をより詳しく書き加える。またその後の各節では日本軍が侵略を拡大していった状況を明らかにする。前述した南京虐殺の記述についても、日本軍が中国の一般住民を集団虐殺した典型的な事例を2つ加え、更に写真を載せる。また、満州での七三一細菌部隊の罪行も書き加えることになっている。中国の側の改訂は、中国の抗日戦争が世界の反ファシスト戦争において重要な地位にあったことを強調することである。日本人はなぜ中国が現段階で改めて抗日戦争部分を改訂し、日本軍の罪状を更に暴露しなければならないのか、深く考えてみる必要がある。

5. おわりに

以上考察したように、日中の平和教育において、平和という目標は同じであっても、その内容は大きく異なることが判明した。しかも、日本はかつて中国を侵略したのであり、中国は現在なおもその事実を忘れていない。それだけに、問題はどのように相反する観点、立場を越えて、平和交流は可能なのか、接点はあるのかということである。

このことは、いいかえれば、中国においては日本の侵略の事実を暴露し、伝えてゆくことと、日中友好とが矛盾しないか、という議論になろう。中国は、それ

を統一しようとしているか。

「中国は社会主義国家である。現行の歴史教材の中には、一定程度日本軍国主義中国侵略の罪状が記述されているが、授業の中で、如実に日本軍国主義の蛮行を再現することは、青少年に愛国主義教育を進めるのに必要である。しかし、我々の出発点は、中国青少年に改めて日本に恨みをつのらせるのではなく、日本軍国主義への恨みと警戒心を喚起し、中国侵略の歴史の再現をくい止めることである。このような指導思想のもとで、日本侵華史を講ずれば、効果的に日本軍国主義の復活をくい止めることができ、中日双方の世々代々の友好を推し進める力ともなろう。」²³⁾

この立場は、日中戦争が終わった時、「戦争を起こしたのは一部の軍国主義者であり、一般人民は被害者である」として、中国人民に対し説得教育を行い、日本に友好を求めた中国の考え方と同じである。この立場は現在に至るまで一貫しているといえる。しかしこれはいわば方便であり、中国の真の気持ちは、日本は、中国への侵略行為を認めるべきだということである。

「あの悲惨な侵略戦争において、中国人民はこのうえない損害をこうむった。調査できる統計によっても、一般人の死傷者は、千八百万人余り（軍隊の死傷者数は含まない）、物質的損害は六百億ドルにもぼっている。おびただしい人が兵隊にとられ、多くの都市が破壊され、さらに世界ではじめて原子爆弾を投下された。同じように戦争で大きな犠牲をこうむった日本人民が、侵略戦争を正当化し、戦争の性質を混同させることを容認できるであろうか。」²⁴⁾

中国は最も平和的国際環境を求めている国のひとつである。それは、昨年の国際平和年での、中国人民平和擁護大会における趙紫陽首相の演説によく表れている。²⁵⁾ 趙紫陽首相は、この場で、軍縮問題についての中国の基本的立場を明らかにし、米ソ両超大国の軍拡競争をきびしく批判すると共に、中国は今後大気圏内の核実験を行わない旨を表明したのである。中国の反核、軍縮、世界平和への意気込みは大きいといえよう。

接点は存在するといってよい。ただそのためには、日本は、謙虚に侵略の事実を認め、中国と対等の立場で、平和を語り合わなければならない。そのためには、平和教育における中国認識の遅れは早急に正されるべきであろう。直視は教育に

真実を生む、とある中国人は語ってくれた。日本の平和教育が、より真実に近づくためには、中国は避けて通れない課題である。広島と長崎の被爆者が、アメリカで反核・平和の行進を行ったように、中国で、反核・平和の行進ができるのは、いつの日であろうか。

なお、最後に中国の原爆に対する基本的立場を、原爆投下時の論説から引用しておこう。

「原子爆弾の発明と最初の使用は、全世界を震撼させた。科学の革命と戦争の革命が同じ日に起こったのである。

原子爆弾の真の性能については、われわれはまだ研究検討に役立つべき十分な資料を持っていない。しかし、さしあたり入手し得たニュース報道から見て、その破壊力の猛烈さと殺傷力の巨大さは、もはや疑う余地のない事実である。……

純粹に科学的な見地から言えば、原子爆弾の発明は、原子の分裂によって発散する一種の“エネルギー”の実際的应用であり、疑いもなく一つの画期的革命である。種々の“エネルギー”を制御する装置がいったん完成すれば、産業革命は生彩を失い、蒸気エンジン、内燃機関、水タービンは時代の遺物と化し、石炭や石油の競争から惹起される政治的角逐もその意義を失うにちがいない。こうした“原子エネルギー”を建設的な動力や、平和的な工業生産に応用するならば、人類の文明は必然的に画期的な改革・進歩をとげるであろう。だが今日、不幸にもこの人類の歴史を左右するにいたる重大な発明は、その鋭鋒をまず無数の殺傷をともなう戦線に試用されてしまった。」「科学が人間の手中に握られる時には人類に幸福をもたらすが、ファシスト侵略者の手に握られた場合は、人類が絶滅させられる。したがって、原子爆弾は平和を維持する強力な道具とすることもできるし、逆に侵略と武力濫用の武器とすることもできる。人類の叡知の最高の成果たる科学的発明は全世界の平和を愛する人民全体によって保有され、使用され、管理されるべきであり、こうした科学的発明＝無尽蔵な“原子エネルギー”は、人類の福祉をはかる方向に使用されるべきである。このように一瞬にして何千、何万という命を奪う武器は、国連の安全保障理事会でその使用を統制する必要がある。このことは今日、すでに世界の進歩

的科学家と人民大衆の双肩に課せられた責任である。

科学を人民のものとし、科学の成果を、平和を守り、人類に幸福をもたらす道具としなければならない。』²⁶⁾

註

- 1) 王崇久「歴史を振り返り、未来を思う」『北京週報』No. 27 1987年7月7日 5頁
- 2) 広島県高教組の1986年度平和教育の総括によれば、回答を得た県内37校のうち、15年戦争を扱ったことがある学校は、わずか7校である。(『広島高教組時報』第489号、1987年7月18日)
- 3) 空辰男「『前世之事 後世之師』—平和教育を深めるために」『広島教育—特集 広島県原爆被爆教職員会の会、第二次訪中平和友好交流団歴訪の記録』413号、1987年11月、3頁
- 4) 《中国教育年鑑》編集部、『中国教育年鑑 1949～1981』「大・中・小的思想政治教育」参照 1984年9月
- 5) 全日制十年制初級課文『青少年修養上冊(試行本)』1986年6月第6版 14頁
- 6) 『全国初中昇学考試政治試題選編 1984年』1985年4月 37頁
- 7) 毛沢東「中国革命戦争の戦略問題」『毛沢東選集第一巻』人民出版社 1968年12月 158頁
- 8) 同上
- 9) 王順興、韓永昌主編『教育学』第19章第2節「少先隊工作」参照
- 10) この記事は、『中国少年報』の記者から直接譲り受けた報告集の中より選んだ。
- 11) 共青团中央組織部、中国青年出版社編、『共青团支部工作手冊』「思想工作」の項参照 中国青年出版社 1986年10月 112、113頁
- 12) 前出空論文 3頁
- 13) 上海、浙江、北京、天津四省市小学語文教材連合編写編 全日制六年制小学課文『語文(試行本)』第1冊～第12冊 1985年1月第3次出版
- 14) 人民教育出版社中学語文編輯室編 初級中学課文『語文 第5冊』1984年6月第2次印刷 67頁。
- 15) 中華人民共和国国家教育委員会制定 全日制中学『歴史教学大綱』1頁 1986年12月第1版
- 16) 同上 3頁
- 17) 胡文彦編初級中学課文『中国歴史 第三冊』「甲午中日戦争」部分参照 1985年6月第4次印刷
- 18) 劉少奇「國際主義と民族主義」国民文庫版 61頁
- 19) 周發增 龔奇柱著『歴史教学与愛国主義教育』山東教育出版社 1984年12月 24頁

- 20) 前出小学課文『語文 第11冊』
- 21) 人民教育出版社編『中国歴史 第四冊』1984年第2版 97頁
- 22) 李隆庚「初中《中国歴史》抗日戦争部分修訂説明」『報刊資料選彙 中学歴史教学』1987年1月 35頁, 「談話初中《中国歴史》第4冊抗日戦争部分的修改」『復印報刊資料 中学歴史教学』1987年2月 27頁
- 23) 張家連「講授中日関係史應該注意的幾個問題」『復印報刊資料 中学歴史教学』1986年1月 45頁
- 24) 楊正光「歴史の教訓を汲みとり, 中日友好を發展させよう—「七・七事変」50周年に寄せて」『北京週報』No. 27, 1987年7月7日 32頁
- 25) 「趙紫陽在中国人民擁護世界平和大会發表講話」『人民日報』1986年3月22日
- 26) この『新華日報』記事は, 小林文男「中国の原爆観とヒロシマ」(広島長崎証言の会編『ヒロシマ・ナガサキの証言』1986年夏季号所収) より引用した。

* 本稿は, 小林文男教授との共同研究の一部であり, 教授の指導の下で, 久留島が執筆した。